

## 英語を使いこなすための 実践的学習法

my English のすすめ

田中茂範 著

A5判・176頁  
本体1,600円＋税

[評者]  
日本 満



### 表現者としての覚悟

私は英語を学び始めてもう45年近くになる。英語を教えることにも30年近く携わってきた。にもかかわらず、学生から英語の効果的な学習方法を聞かれると長い沈黙の後、何かを言い始めはするが、答えるたびに言うことが違ったり、極端に局部的な話に終始したり、「英語をたくさん読む・聞くこと」など当然過ぎることを言ってみたりで、自分の答えに満足したためしがない。要するにこれだけ長い間英語を学んできて・教えてきて「英語をどう学べばよいか」という核心的な問いについて自分自身で答えも確信もないままきてしまったのである。情けない話だが自分には大き過ぎてどこから手をつけていいかわからず避けてきた問題である。

本書はまさにその問題に真正面から向き合ってくれている本である。ご存知の読者は多いと思うが、著者は英語学習の世界に「コア」「チャンク／チャンキング」「表現英文法」「ネットワークング」などさまざまな概念を提案してきた人で、その著者が今回さらにいくつかの新たな概念 (my English, タスク・ハンドリングと言語リソース, 基本語力, 慣用表現力, など) を加えて、表現者

として英語を学ぶという観点から、何をどのように学べばよいかについての全体像と細部を練りに練って実にシンプルな形で提言している。英語を学んできた人であれば、著者の提言はごく直観的に理解・納得できるのではないかと思う。

私はこの本を読んで、自分には2つのことが欠落していることに気づかされた。ひとつは、表現者としての覚悟。もうひとつは、英語の何をどのように学んだらいいのかについての全体像とその構成要素の関連性の理解である。表現者としての覚悟とは、英語でタスクをこなす段階では、英語力のないものねだりをしたり、不足を悲観したりするのではなく、そのときその場で、自分が持ちあわせている英語力 (my English) をフルに活用して、自分の思いを表現することに集中するのだという覚悟である。全体像と構成要素についてはこの紙面では紹介しきれないが、表現者としての英語学習は、突き詰めれば「タスク・ハンドリング・スキル」と「言語リソース」の2つを相互補完的に増強することであるという主張で、章を追うごとにその中味が明らかになってくる。説明が理路整然・単純明快なため学習プロセス全体をイメージでき、今どの力を身につけようとしているのかを意識できる。そして、ありがたいことに、その力をつけたいのであればこうすればよいという解説つきである (この解説がまた素晴らしい)。

今度、学生から質問を受けたら、本書をさっと取り出し、16, 23, 91ページの図などを示しながら説明してやりたいと思う。

(ひき みつる・名古屋市立大学教授)

## 英語辞書をつくる

編集・調査・研究の現場から

南出康世・赤須薫・  
井上永幸・投野由紀夫・  
山田茂 編

A5判・244頁  
本体2,500円＋税

[評者]  
森口 稔



### 知ってますか？ 作り手の努力

いつ頃からか、レストランやスーパーで食材生産者の紹介を目にするようになった。たとえば「今日のトマトは熊本のお〇〇さんが栽培したものです」とか「牛は岩手の△△さんが育てました」という類の情報である。作り手の顔が見えると、我々は一種の安心感を持つことができる。食の安全を考えれば、望ましい方向だと言えよう。

辞書はどうか。紙の辞書ならば、扉に編集主幹の名前が書かれている。ところが、携帯型電子辞書が普及して紙の辞書が敬遠され、その電子辞書も、無料のオンライン辞書によって頭打ちとなり、辞書の編者や執筆者の名前は、どんどんと見えにくくなってきた。

食材は生産者が見えるのに、辞書の作り手は見えなくてよいのか。

本書は、そういった傾向に対する一つのレジスタンスである。『ウィズダム』『オーレックス』『ジーニアス』『プログレッシブ』『ライトハウス』など、日本の代表的英和辞典の編纂や辞書指導に関わった研究者たちの論文12本が収録されている。各論文は十数ページほどで独立しているため、どこから読み始めてもよい。執筆者

自身と辞書学との出会い、辞書編纂の苦労話、教育的視点に加え、コロケーションの抽出、類義語の違い、学習英英辞典の歴史、political correctness、ポライトネス理論、World Englishesなど、英語教育や英語学における様々な問題が取り上げられている。裏を返せば、辞書編纂には、言語学の各分野の視点が必要であることを示唆していると言える。

ただ、言語学的な幅の広さは、読者によっては若干の障壁になるかもしれない。たとえば、Face Threatening Act やガーデンパス文などの用語は、ポライトネスやリーディングの理論を知らなければわかりにくい。できれば、解説が欲しいところである。

一方、コーパスと電子辞書は、ほぼ全員の執筆者が取り上げている。辞書編纂に不可欠であるコーパスは当然だが、電子辞書に触れざるを得ないのは、辞書の将来に対する不安の現れだろうか。

執筆者の一人、赤須薫氏が言うように「辞書編纂は常に原則と現実の要求とのほざまにあって、葛藤の連続」である。その葛藤を乗り越えた結果として生まれる、「水準が高過ぎるので、言葉を編む者の努力が見えにくい」というジレンマを投野由紀夫氏は嘆く。

質の悪い道具は、その悪さ故に存在を意識せざるを得ない。質が上がれば上がるほど、道具は無色透明なものとなり、ユーザーは意識しなくなる。しかし、質を保つためには、作り手の努力が不可欠である。辞書という道具を作る人々の努力を、本書によって是非知ってもらいたい。

(もりぐち みのる・  
長浜バイオ大学非常勤講師)

## 英語スピーキング指導 ハンドブック

泉恵美子・門田修平 編著

A5判・402頁  
本体2,900円＋税

[評者]  
赤池秀代



### スピーキング指導はこれだ！

400ページ近い本書を隅から隅まで読み、良い本に出合った、と思った。「スピーキング指導のQ&A」、「実践編」、「理論編」で構成されている。最初の「Q&A」は、初心者をやさしく導くものかと思ったら違い驚いた。最初から理論、社会背景、学習指導要領、様々な文献からの引用など本気で読む人に迫ってくる。

「実践編」で特筆すべき点を幾つか挙げる。①生徒の心を動かす活動(p. 45)。生徒の心を動かせたら、成功は約束されたようなものだ。②生徒が話すことに対して持っている抵抗を少しずつ取り除く工夫 (p. 58)。③教師が教えるのではなく、生徒に気づかせる工夫 (p. 62)。これは、次の学習指導要領の柱とされるアクティブ・ラーニングにもつながる。④教師の心を動かす工夫も (p. 64)。FonFのレベルの高そうな活動も、実際の例を読むと微笑みがでる。

また、是非自分の授業に取り入れようと思ったものもたくさんある。①教科書の発展でtherapy dogの話を「犬の立場」から語らせるもの (p. 78)。②発表練習のさせ方 (p. 126)。自分で練習した後、ペアになり、相手に評してもらう。その後グループ、クラス

への発表と続くわけだが、アドバイスしたペアの相手は、発表した生徒がクラス全体に評価された場合、自分もうれしい。一緒に発表を作り上げていく感じになるだろう。発表当事者にしていても、味方がひとりはいることになる。発表が苦手な生徒にはなんと効果的な指導方法だろう。

「理論編」は最新の研究成果がふんだんに盛り込まれ、読み応えがある。実に内容が深い。為になった箇所の例を挙げると、①翻訳を介して単語を学習した場合と、コミュニケーション場面から学習した場合の違い(p. 304)。②相互作用本能に関する実験 (p. 302)。はるか昔、ある研修会で聞いた衝撃的な話を思い出した。言葉を使えない夫婦と幼い子どもの話だ。夫婦は自分たちの子に言葉を学ばせようと、テレビの前にずっと座らせていたが、十分話せるようにはならなかった、という話だ。本書に書いてある最近の研究・実験を読み、氷が解けるように納得した。この鍵である interpersonal interaction を教師は常に念頭に置いて授業をする必要がある。教師が話し続けてもだめなのだ。読みながら、様々な失敗場面が蘇った。あの活動を次はこうやってみよう、としばらく考え込むことが多々あった。とてもありがたい。

実践と理論、どちらかでも補強したい教員にとってはバイブルの様な本の登場だ。本棚に置き、困ったとき、アイディアがほしいときなど必ず味方になってくれる本である。私はこれから何度も読み返すだろう。英語教育に携わる全ての人に心からお勧めする。

(あかいけ ひでよ・  
文教大学・花咲徳栄高等学校講師)